

重厚な防音扉が閉まった瞬間、耳の奥が痛くなるような静寂が室内に満ちた。都会の夜を彩るネオンが淫らに明滅するのを眼下に見下ろす、会員制サロンの最上階。

通されたVIPルームは、およそ商談という言葉からは程遠いほど贅を尽くした空間で、最高級の革張りソファと、肌を刺すような冷え冷えとした空気感に支配されていた。

(……怖い。でも、僕がなんとかしなきゃ。……それにしても、なんで僕なんだろう。ただの平社員の僕が、どうしてグループのトップに直接呼び出されたりしたんだろう……)

僕の目の前には、若くして巨大グループを束ねる社長となった美しい男が座っている。

穏やかに口元を緩めたその表情はどこか優しげで、整いすぎているほど均整の取れた顔立ちは、まるで舞台の上の人物のように目を引いた。

オーダーメイドのスーツを隙なく着こなす彼は、

指先一つ動かすだけで周囲を震え上がらせるような、静かな威圧感に満ちていた。琥珀色の液体が揺れるグラスを傾ける仕草は、どこまでも優雅で、それでいて僕の退路をすべて断つような、逃げ場のない視線を向けている。

「……あの、社長。この度は、弊社の上席が大変な失礼を……っ！ 本当に、申し訳ありませんでした……っ！」

僕はソファの前で、床に届くほど深く頭を下げた。

先日、僕の上司が酔った勢いでこの若き支配者の機嫌を決定的に損ねてしまったのだ。もし彼に縁を切られれば、僕の会社は一瞬で瓦解してしまうだろう。謝罪の場に、なぜか名指しで呼ばれた僕は、心臓の鼓動がうるさくて破裂しそうだった。

「顔を上げてください、由基くん」

聞き覚えのある、けれど当時よりずっと低く艶を

帯びた声。恐る恐る顔を上げ、至近距離でその端正な顔立ちを凝視して、僕は息を呑んだ。

「お、憶也くん……っ？」

「……久しぶりですね。ずっと、君を探していたんですよ」

昔見た、柔らかな微笑みだった。転校前の高校で、隣の席に座っていた奥谷くんだ。

彼はいつもクラスの中心にいて、誰からも好かれていて、何をやらせても器用にこなしてしまう人だった。席が隣ってだけで、時折話したり、ペアになったりしたけれど、ずっと遠い場所の人間だった。

中途半端な身体を抱えて、どこにも居場所を見つけられなかった僕とは、最初から住む世界が違うはずなのに。それでも、気づけば目で追ってしまうくらいには、憧れていた。

「あの日、君が僕の告白を振った以来、ですね」

「あ、それは、……」

美しいその瞳の奥には、昔とは違って冷ややかな熱がある気がする。

高校時代、放課後の誰もいない教室。転校前の最終日に、彼は僕を呼び出した。そして真剣な顔で僕の手を握って言った。

『由基くん、僕と付き合ってくれないかな』

でも、目立たなくて何の取り柄もない僕が、クラスを中心にいた彼に好かれるはずなんてない。これは罰ゲームで、僕が浮かれて返事をした後に待つ展開はわかっていた。

だから僕は、その場から逃げ出したのだった。

「……どうしたんです？ 鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして。僕に告白されたこと、思い出していましたか？」

僕の思考を見透かしたような、甘い声。彼はグラスを置くと、音もなく立ち上がり、僕との距離をゼ

口にする。

「由基くん。僕はただ、あの日の続きがしたいだけなんです」

憶也くんはグラスを置き、穏やかな、けれど一切の光を通さない瞳で僕を見つめた。その声は低く、どこまでも優しい。だからこそ、逃げ場がない。

「……っ、なんでもするから。僕にできることなら、なんでも……っ！」

必死の思いで縋るように顔を上げると、彼はふっと目を細めた。高校時代には見たことのない笑みだった。

「なんでも、ですね？ ……じゃあ、僕が満足するまで、ここで歌ってください」
(……えっ？ 歌う……？)

憶也くんは手元の端末を流れるような動作で操り、巨大なモニターに一曲のラブソングを予約した。ドクン、ドクンと心臓の鼓動をなぞるような、重低音のイントロが部屋に響き渡る。

「由基くんが僕を愉しませてくれたら、今回のことは忘れてあげます。……でも、僕を退屈させたら、その瞬間にすべて終わりです。由基くんの居場所も、あの上司もね」

（そんな……っ！ 僕がここで歌わなきゃ、みんなが路頭に迷う……！）

抗えない支配感に押しつぶされそうになりながら、僕は震える手でマイクを握りしめた。モニターには、かつての告白を思い出させるような、甘く切ない歌詞が流れ始めている。

「一曲だけでいいんです。歌い切ってください」

「……わかり、ました……っ」

（やるしかないんだ。歌えばいいんだよね？ それ

だけで、許してもらえらなら……！)

覚悟を決めてマイクを唇に寄せた、その瞬間。隣に座っていたはずの憶也くんが、音もなく僕の背後に回り込んでいた。逃げ場を塞ぐように、大きな手が僕の細い腰をぐいっと強引に引き寄せる。

「あ……っ！」

(近い……っ！ 背中から、憶也くんの熱い体温が伝わってくる……。心臓が壊れそうなくらい、バクバクする……っ！)

「どうしたんですか。歌うんでしょう？ ……ほら、口を動かして」

耳元で、熱い吐息と共に、低く甘い声が響く。それと同時に、憶也くんの大きな指先が、僕のうなじをゾクゾクするほど愛おしげに這い上がった。

「……ずっと、そばにいて、欲しいから……♪」

震える声を絞り出し、なんとか言葉を紡ぐ。けれど、歌い出した直後、憶也くんの指先がゆっくりと首筋をなぞった。そして熱い手が鎖骨をなぞり、そのまま柔らかなおっぱいへと滑り降りてくる。

むにゅ♡

「ひ、あ……っ、んう……っ♡」

(……っ！ 掴まれた……♡ 憶也くんの手が、僕のおっぱいを……っ！♡)

「どうしました？ 歌詞、止まっていますよ」

からかうような声が耳を震わせる。憶也くんの大きな掌が、薄い生地の上から僕の左のおっぱいを、むにゅうう♡と力強く揉み上げた。

「♪この……お、も……い、を……っ、ひああッ♡」

(そ、んな♡ こんなの、歌えるわけない……っ！

♡)

「……声が小さいですよ。ちゃんと歌ってください

♡」

そう言いながら、彼は手のひらの力を強めた。感触を確かめるように、指先を柔らかなおっぱいに深く食い込ませ、不規則に形を変えていく。

むにゅう♡ぐに♡むにゅむにゅ♡

「ふ、あ♡あ、い……を、誓う……から……っ♡
は、ん……っ、ん、あ……っ♡」

歌おうとするたびに、おっぱいに強い圧迫が加わる。憶也くんの指が、シャツとインナー越しに僕の乳首をピンポイントで弾いた。

コリッ♡

「ひっ！♡……あ、んうッ♡」

「随分と敏感ですね。まだ少ししか触っていないのに。布の上からでも分かるくらい、硬くなってますよ、由基くん」

「ち、が……っ♡ふ、ぐうッ♡そんな……っ、ん、んう……っ♡」

コリ♡ コリ♡ コリ♡ ぐりっ♡ ぐりぐり♡

容赦のない刺激。指先で尖りを弄られ、そのまま円を描くように執拗に責め立てられる。

「♪……あ、なた……の♡ んぁあっ♡ ひ、瞳、にッ♡ あ♡ あんッ♡」

「……リズムが乱れてますね。乳首はこんなに悦んでいるのに、歌の方は疎かになっていいんですか？」

「あんっ♡ ああ♡ だめっ♡ 憶也くん……っ♡ こりこり、しないで……っ♡」

「歌詞が違いますよ？」

憶也くんは僕の懇願を無視し、今度は両手で左右のおっぱいを同時に、むにゅ♡ と驚掴みにした。

むにゅ♡ むにゅ♡ ぐにい♡ むにゅうう♡ むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡

「ひあっ♡ ん♡ ああっ♡ ん、あっ♡ ああ……っ♡」

「ほら、もっと声を張って。謝罪の気持ち、僕に届